

第三回 神人の理

平成26(2014)年5月22日  
竹部 弘(教学研究所)

はじめに

金光大神に見えた人が抱いた印象

ご生質温和にして、威ありて猛からず。うやうやしく、御安く、寛仁大度に、(理解Ⅲ御道案内2-9)

教祖様は、きついような優しいような方でありました。之が本当の神様じゃなあと思われ、こういうような御方はどこにもあるまいと思いました。(『金光大神事蹟集』2、秋山甲伝)

厳しくも広やかな人と信心、その道

一、立教

前回講座以後のあらまし

安政6年1月、庄屋に隠居を願い出、3月の宗門帳改めで正式に届け(覚書7-1)。

5月末、娘くらの病気でおかげを受ける(覚書7-5~9)。「これで死んでもおかげ」の思い。6月10日金子大明神の神号を許される(覚書8-1)。

6月16日、宇之丞が病気となり、大患前年に生まれ年を祭り替えていたことを糺される(覚書8-3)。

6月、麦を俵に入れる際の神の教え、真似た人の形のまねと心のまねの戒め(覚書8-7)。

9月10日、浅吉に牛使いを譲る(覚書9-1)。

I、取次の頼みを、他ならぬ金光大神に委ねる理由

1 家業と神前奉仕が「両方の差し支え」になる状況

金子大明神、この幣切り境に肥灰(農業)さしとめるから、その分に承知してくれ。外家業はいたし、農業へ出、人が願い出、呼びに来、もどり。願いがすみ、また農へ出、またも呼びに来。農業する間もなし、来た人も待ち、両方のさしつかえに相成り。なんと家業やめてくれんか。(覚書9-3-1~3)

\*農業経営の成功：養父糸治郎と金光大神の働きにより、安政の頃には大谷村の百姓125軒のうち9番目の田畑所有高。さらに安政2年11月には山林も購入。大患後の「身弱し、難渋」な状態でありながら、経営安定・上昇の志向。

\*参り来る人

- ・「覚書」から窺える他に、伝承では大谷村の川手藤五郎、阿賀崎村(倉敷市)の坂根利三郎等。
- ・安政7年正月に調べられた「願い主歳書覚帳」には最初の一年間で136名が記載。この帳面は、「信者氏子、拍手お許し。国所歳名覚つけ、神門帳こしらえ」(覚書10-1)とのお知らせにより調べられたもの。

→「事情は理由にならない」

## 2 「死んだと思うて欲を放して」—安政2年「九死一生」の大患の回顧

其方四十二歳の年には、病気で医師も手を放し、心配いたし、神仏願い、おかげで全快いたし。その時死んだと思うて欲を放して、天地金乃神を助けてくれ。家内も後家になったと思うてくれ。後家よりまし、もの言われ相談もなり。子供連れてほとほと農業しおってくれ。（覚書9—3—4～5）

\* 人生の新出発—ない命であった、その人生を神がもらう。

\* 家族のこと—妻とせと、浅吉(15歳)を筆頭に5人の子供、末子このは2歳。

\* 金光大神の思いは？—ある想像

〈参考〉青木茂『詩伝 その人』（童心房、1980年）

その人は、黙って、長いこと、神前にひれ伏していた。つい耳もとで、あまりにもはっきり、肉声そのままに、じっくりと、話しこまれた神さまの声であった。[…]「のう文治、そうじゃろうが、きいてくれるか、わかってくれるか。頼むぞ、頼んだぞ」と、一こと、一こと、胸のなかへたたみこむように、静かで、そして暖かいお言葉であった。／その人は、いつまでも、いつまでも、頭をあげなかった。ついそこに、神さまのからだのぬくみを感じ、いきづかいのひびきを感じた。そこからのがれることが惜しくて、勿体なくて、みじんのみじろぎもせず聞いていた。（42頁）

\* 「その時」如何（内田守昌「私にとっての立教神伝」『いのちが承服せねば』、平成7年）

・ 湯川誠一師：「死んだと思えなんだから、思わんでよろしいがな。思わんならんようになったら、思うたらよろしいがな」

・ 高橋正雄師「死んで死んで、死にきって、生きて生きて、生ききりたい」

・ 内田師入院中の体験

\* 「生きる」と「死ぬ」の逆説的な関係—信仰の上で「死ぬ」ということが、失われ失われていく喪失の極点というばかりでなく、それよりはむしろ「生かされる」実感、生かしめるものの充溢感と共にあるということ。

\* 死を前にして見えた世界の姿：生が当たり前でない側から見えた恵みに満ちた様

〈参考〉①高見順「電車の窓の外は」

電車の窓の外は 光にみち 喜びにみち いきいきといきづいている この世ともうお別れかと思うと 見なれた景色が 急に新鮮に見えてきた この世が 人間も自然も 幸福にみちみちている だのに私は死なねばならぬ だのにこの世は実にしあわせそうだ それが私の心を悲しませないで かえって私の悲しみを慰めてくれる 私の胸に感動があふれ 胸がつまって涙が出そうになる 団地のアパートのひとつひとつの窓に ふりそそぐ暖かい日ざし 楽しくさえずりながら 飛び交うススキの群 光る風 喜ぶ川面 微笑のようなそのさざなみ かなたの京浜工場地帯の 高い煙突から勢いよく立ちのぼるけむり 電車の窓から見えるこれらすべては 生命あるもののごとくに 生きている 力にみち 生命にかがやいて見える 線路脇の道を 足ばやに行く出勤の人たちよ おはよう諸君 みんな元気で働いている 安心だ 君たちがいれば大丈夫だ さようなら あと

を頼むぜ じゃ元気でー (『新潮現代文学 14 いやな感じ 死の淵より 高見順』、新潮社 334～335 頁)

②ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟 (中)』(新潮文庫、1978 年)

「そうだ、僕のまわりには小鳥だの、木々だの、草原だの、大空だのと、こんなにも神の栄光があふれていたのに、僕だけが恥辱の中で暮らし、一人であらゆるものを汚し、美にも栄光にもまったく気づかずにいたのだ。」(69 頁)

\*本教の先人達一天地の大恩を感じることに、その大きな恩に対して申し訳なくお詫びせねばならないような気持ちが縋い交ぜに

- ・「これまで天に向っては拝礼していたが、地の大恩に対しては一言の御礼をいうたこともない。その上『飛脚ばり』というて、歩きながら大地に放尿したり、その他、お土地にいろいろなご無礼をして来ている。よく罰が当たらずに、今日まで無事に生かして下されたものである」(『安武松太郎師』、金光教甘木教会親厚会、昭和 39 年、13 頁)
- ・神の計らいを受け切ることを修行として取り組む中で、神の恵みに満ちた世界を感じた時、雑草をも命あるものとして、踏みつけることを詫びながら裸足で歩いたという体験(『天地日月の心』、金光教合衆教会、2004 年、84 頁)

\*大患体験のもう一つの意義

生死の境目・死を覚悟する場面で出会わされた、生かそうとする神の意思と働き一いのちや世界を支えるものの実在感に包まれること→覚悟と、覚悟を導き支える厳しくも広やかなものとの関係

### 3 「実意丁寧神信心」の教祖像—新旧両解釈

此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が、世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ。(覚書 9—3—6)

\*旧解釈＝「金光大神のように実意丁寧神信心であって、難儀している氏子が多くいるから、取次助けてくれ」と解する。

- ・実意丁寧神信心は金光大神に固有な信心内容ではなく、それにも関わらず難儀している多くの人間をも視野に収めた言葉。神の悲願、金光大神の共感共苦がいや増す。
- ・実意丁寧神信心によって助かりに辿り着くのではなく、人間の無礼や難儀性に気づくことによって(安政 2 年の大患、安政 5 年 12 月 24 日のお知らせ)。

〈参考〉

此方のやうに、実意丁寧に神信心致して居る氏子が、世間になんぼうも難儀して居る、取次助けてやってくれ。(『金光教大要』、金光教本部、昭和 8 年、24 頁)

\*新解釈＝実意丁寧神信心な氏子(＝金光大神)に、取次助けてやってくれとの頼みと解する。

・「実意丁寧神信心」は金光大神に固有の信仰内容、余人には認められない救済者たる資格を示すもの。

〈参考〉

此の方のよう実意丁寧神信心している者が、世間に多くの難儀な人があるから、取次助けてやってくれ。(『金光大神』、金光教本部教庁、平成 15 年、130 頁)

\*両解釈の意義

四十二歳の大患の場面で、金光大神の実意丁寧神信心ゆえに初めて神に届き得たということであれば新解釈になり、神の指摘によって初めて知らされたという点を重視すれば旧解釈になる。

II、取次助け―「両方の差し支え」から「両方の立ち行き」へ

この神伝によって目指されている、信心の境地、ありようを、神の約束とも誓いとも言うべきものとして

1「氏子あつての神、神あつての氏子」

神も助かり、氏子も立ち行き。氏子あつての神、神あつての氏子、末々繁盛いたし、親にかかり子にかかり、あいよかけよで立ち行き、とお知らせ。（覚書9-3-7）

\*関係の理

\*心情の理

〈参考〉『金光教大要』（昭和8年、40頁）

此の神愛を最も明瞭に示すものは、氏子ありての神、神ありての氏子の教語である。〔…〕大祖神としては、氏子の為にこそ神は存在するとまで、切なる思召を掛けさせ給うのである。氏子を愛撫することが、大祖神の唯一の責務である。

2 神の感慨―大患の回顧

どうしてこういうことができたじゃろうかと思ひ、氏子が助かり、神が助かることになり、思うて神仏悲しゅうなりたの。（覚書3―6―3）

\*神を求めて神に見出されるという出会い

\*金光大神を神が待っていた長い歴史があるという伝え

金神が人民に安心を授けてやろうと思つてきたけれども、たまたま信心する者があつても逃げるばかりして、真に心の定まった氏子はこれまでなかった。戊の年（金光大神）は、信心をしだしてから、幾度試してみても心を変えずに神にすがってくる。もう、その方の心は動かぬということを神が認めた。その方の口と姿とを貸してくれ。神が天地の理を説いて、安心の道を授けてやる。（理II大喜3―2）

\*神も感無量―神と人、繋がり難いものが繋がることを得た、ようもようもここまでという感激の深さ。

3 天と地をつなぐ道―相異なり、時に相反するものをつなぐ

〈参考〉小川洋子『博士の愛した数式』（新潮文庫、2005年）

「物質にも自然現象にも感情にも左右されない、永遠の真実は、目には見えないのだ。数学はその姿を解明し、表現することができる。なにものもそれを邪魔できない」空腹を抱え、事務所の床を磨きながら、ルートの心配ばかりしている私

には、博士が言うところの、永遠に正しい真実の存在が必要だった。目に見えない世界が、目に見える世界を支えているという実感が必要だった。(179～180頁) 相異なり、時に相反するものをつなぐ一目の前の現実と永遠の真実

### Ⅲ「立教神伝」を受けて

一つ、仰せどおりに家業やめて、お広前相勤め仕り。安政六己未十月。(覚書9-3-8)

#### 1 田地の売却と施設整備

田地売り、うえへ渡し。入用払い、文久元辛酉十二月。

同じく亀屋、同じく売り、同じく壬戌年(文久二)十二月。

同じく裏毛地(裏作のできる田)田畑おいおい売り。田地売りじまい、明治元戊辰十二月まで。銀子はお上献金、神様より仰せつけられ候。(覚帳5-2)

・文久元年、東長屋建築。翌2年6月、東長屋に上手水を新設、参拝者用の手水場と便所増設、東長屋に二間を増築、12月母屋の土間四畳分を座敷にして参拝者席が十畳に。

・伝承では、庄屋や親戚の反対に遭い、農地がなければ責められまいと思って売ってしまったという。しかし「覚帳」の記述からすれば、田畑の売却代金は文久元年の東長屋建築資金に、あるいは藩への献金に充てられたということになる(覚帳5-1～2)。また、この時の売値は、普通よりも高いくらいであったという。売却先は、古川八百蔵、藤井駒次郎らであり、割高でも買い取ることをもって、広前の施設整備を側面から支えたのではないかと推察されている(金光和道「神前奉仕開始後の広前の周辺—東長屋・『宮』建築など諸経費支出の背景—」紀要『金光教学』第39号)。

#### 2 その後の経過

安政7年正月	参拝者の記録「願主歳書覚帳」調べ(覚書10-1)
文久元年	東長屋の建築(覚書10-3～5)
2年夏	はしか流行、金光大神の取次で救われる者あり(覚書11-7)
文久2年正月～	実弟香取彦助の病氣・世話・快癒・死(覚書11-1～3・8)
3月～	修験者の干渉(覚書11-6)
文久3年2月	とせ最後の出産、「不浄・穢れ・毒断てなし」(覚書12-1～3)
3月21日	表口の戸をはずし、「戸たてず」に(覚書12-4)
元治元年正月1日	宮建築の頼み～白河家入門「神拝式許状」(覚書13-1～3)
6月	湯、行水差し止め(覚書13-4)
慶応2年9月	養母いわの死・葬儀(覚書14-4・6～7)
11月24日	金光大権現に
慶応3年2月	白河家から神主職を受ける(覚書15-1～2)

#### 二、神のひれい—慶応三年十一月二十四日のお知らせ

一つ、日天四の下に住み、人間は神の氏子。身上に、いたが(痛い所)病氣あつては家業できがたなし。身上安全願い、家業出精、五穀成就、牛馬にいたるまで、氏子身上のこと、なんなりとも実意をもって願い。

一つ、月天四のひれい、子供子、育てかたのこと、親の心、月の延びたの流すこと、末の難あり。心、実意をもって神を願い、難なく安心のこと。

一つ、日天四 月天四 鬼門金乃神、取次金光大権現のひれいをもって、神の助かり。氏子の難なし、安心の道教え、いよいよ当年までで神の頼みはじめから十一か年に相成り候。金光大権現、これより神に用い。三神 天地神のひれいが見えだした。かたじけなく、金光、神が一礼申し、以後のため。（覚書 15—8）

## 1 神観・人間観・世界観の表明

\* 「日天四の下」という空間的広がり、「神の氏子」という人間観。出産・育児に関わる「月天四のひれい」と時間的射程をもつ「末の難」「安心」。

\* 「三神 天地神」という新たな神の名が、日天四・月天四・丑寅鬼門金乃神を総合する形で示されている。

## 2 神の礼

これまでの歩みを振り返って、「神の助かり 氏子の難なし」と言える道が開かれてきたことへの神の喜びと感謝、さらなる標榜と誓い。

〈参考〉神の頼みと神の礼

別儀ではない。この度、此方未年、よんどころなく屋敷宅がえにて、十匁の錢借り所なし。普請入用金神が頼む。（安政4年10月13日、覚書4—1—5）

其方四十二歳の年には、病気で医師も手を放し、心配いたし、神仏願い、おかげで全快いたし。その時死んだと思うて欲を放して、天地金乃神を助けてくれ。（覚書9—3—4）

元治元甲子正月朔日お知らせ。天地金乃神には、日本に宮社なし、まいり場所もなし。二間四面の宮を建ててくれい。氏子安全守りてやる。（覚書13—1—1）

戌の年は、神の言うとおりにしてくれ、そのうえに神と用いてくれ（立ててくれ）、神も喜び。金乃神が、戌の年へ礼に拍手を許してやるからに、神とあつたら、他領の氏神と言うな。大社小社なしに、拍手打って一礼いたして通り。（覚書5—1—2）

三神 天地神のひれいが見えだした。かたじけなく、金光、神が一礼申し、以後のため。（覚書15—8—8）

金光大神社の口で天地乃神が御礼申し。このうえもなし。（覚書18—3—4）

\* 金光大神の存在意義—「取次金光大権現のひれいをもって」

\* 「神の助かり。氏子の難なし」

〈対照〉「覚帳」では、「神の助かり」と「氏子の難なし」の間に「一つ」の区切り  
一つ、日天四 月天四 鬼門金神、取次金光大権現のひれいをもって、神の助かり。一つ、氏子の難なし、安心の道を教え、いよいよ当年までで神の頼みはじめから十一か年に相成り候。（覚帳11—7—5～6）

\* 「天地神のひれい」と「これより神に用い」—金光大神も神も新たな段階へ

\* 「天地神のひれいが見えだした」こと—神の役目が立つ、神が神としてあることができる、神が世に出る

\* 「ありがたい」と「かたじけない」

\* このお知らせでは、「一つ」で区切られる三つのまとまりがあるが、その三つのことの内、初めの二つでは人間の助かりが言われている。人の助かりと神の助かりはセットであり、人の助かりは神の助かりの前提。

### 三、神人の理

#### 1 「氏子あつての神、神あつての氏子」

\* この表現は、「覚書」では元治元年と明治6年に記され、「覚帳」では明治6年のみ。

其方取次で、神も立ち行き、氏子も立ち。氏子あつての神、神あつての氏子、子供のことは親が頼み、親のことは子が頼み、天地のごとし、あいよかけよで頼み合いたし。（覚書 13—1—7）

氏子あつての神、神あつての氏子、上下立つようにいたし候。（覚帳 17—25—7、「覚書」では「氏子ありての神、神ありての氏子」）

#### \* 神と金光大神の応答

「わしは生神ではない。わしは肥かたぎじゃ。天地金乃神様に頼めばよい。わしはただ、神様へ申しあげるだけのことじゃ」と仰せられてご神前へお入りなされたが、すぐ、神様から神がかりありて、「此方金光大神はのう、『肥かたぎの金光じゃから、天地金乃神へ頼めばよい』と言うがのう、金光大神、と頼んでおけばよい。此方の言われることを聞いて、そのとおりにすれば、神の言うことも一つじゃ。金乃神はのう、何千年このかた、悪い神と言われたが、此方金光大神が神を世に出してくれたのじゃ。氏子が天地金乃神のおかげを受けられるようになったのも、此方金光大神のおかげ。神からも氏子からも双方よりの恩人は此方金光大神である」と仰せありて神上がりたまえり。後、また教祖が、「今、神様があのよう仰せられるけれども、わしはほんの神様の番人のようなものであるから、私たちに頼んだからとておかげはいただかれはしませぬ。なんでも、天地金乃神様、と一心におすがりなされよ」（理 I 近藤 71）

金光大神は自分に生神の力があるのではなく神のおかげであると語るが、神は反対に金光大神のおかげであり、神からも氏子からも「双方よりの恩人」と述べる。神と金光大神が、互いに相手を立て合い、また互いに自分を足らぬものとして小さくし合うとでも言える関係。

#### 2 教説史にみる「神の助かり」

##### ① 高梁川「神も助かり」（『新光』第82号、大正元年12月15日）

（「師の大人」一畑徳三郎の教えとして）「神も助かり」とは、神、教祖によりて助けらるゝとの意にあらず、神の意を知らずして、自ら迷い苦しめる世の氏子を、如何にもして救ひ助け、真の神の氏子たらしめてんとの、切なる神の御思、我が教祖によりて始めて抒くるを深く喜び給ふ、忝けなき親心の表れたる御言葉なり。この一語、真に味わひ見よ、我が親神、直に我に現れ給い、「真に難有」の念油然として起り、心自ら真にして、神徳人徳兼ね具はり神人一致の妙境に体達するを得ん。

②高橋正雄「我信心」（『金光教徒』第265号、大正9年5月10日）

『氏子あつての神』とは、神の思ふ所為す所、只氏子の為めと云ふ外は何もない、氏子の為めの神である、氏子がなければ神はかく思ひもしもせぬ、神がかく思ひかくなすは、全く氏子があるからであるとの、忝けなき思し召しと伺い奉らるるのである。更にこれを云へば、氏子におかげを受けさせたい為めばかりの、この神であるぞと仰せらるるので、前に述べた『神も助かり』の御神意と、同じ深き思召と伺ひ奉らるるのであって、[…]

③高橋正雄「神が助かる」（『金光教徒』第686号、昭和4年10月25日）

神が助かると云ふ御言葉と神が生まれると云ふ御言葉とは、同事を云ひ現されて居るのであって、それは教祖の生活そのものがさうなつて居るのだ。御自身の一生が神を助けた事になつて居り、神を生んだ事になつて居るものだから、その事実気づかれてそれをかう云ふ御言葉で云ひ現されたのである。

④『概説金光教』（金光教本部教庁、昭和47年）第2章第3節「信心の基本的構造とその動態」

神・人のかかわり 神は人間とはなれた存在ではなく、人間の生きることの根源をなすはたらきである。人は神なるはたらきなくしては立ち行かない。そしてその神にむかつて、その生かされている生命の全能力を傾注して、その真実をつくしてはたらきかける、そういうことによって神のおぼしめしを実現し顕現するような線で自分のはたらきをあらわしていく。そうすることによって神がそこにあらわれてくる。それが神が神として立ち行くということである。神本来の願いが成就することである。また、そうしていくことで、人間が真実の人間になるのである。人間の真実の生活がいとなまれるのである。一言でいえば、人間は神なるはたらきによって立ち行かしめられているのであるが、その神は人間の実意丁寧な生のいとなみに応じてあらわれるのである。基本的には、そういう信心の構造になっている。（225頁）

⑤第『42回通常教団会議事録』（平成20年12月2～7日、教務総長理事者説明）

ここに神が生まれる、神が世に出るという内容を持つての神が助かるということがある。教祖様の歩まれた道が神様を助けたことになっていることであり、神様を世に出した金光大神様のお取次によって神が生まれるという内実を伴っていたということでもあります。（20頁）

氏子の助かりの中に「神が助かる」という内容が同時に成就されていくために、自分の願いを神様の願いに重ね合わせ、神様と共に生きる信心辛抱、先を楽しむ生き方を伝えていくことが大切です。（21頁）

\* 「神の助かり」—ある出来事・段階というそれぞれの場面にとどまらず、長い時間をかけての、生涯の意味というようなものとの関わりが焦点になってくるのではないか

\* 生誕の意義、人生の意義—「運命との和解」と「運命の実現」（第一回講座から）

\* 「生かされて生きる」と「生かされて生かす」